

V 教育課題

第13分科会

キャリア教育

■ 研究課題 ■

勤労観・職業観を育むキャリア教育の推進と校長の在り方

分科会の趣旨

現在、我が国は、少子高齢化が進む中、消費停滞や雇用不安など経済状況を中心に低成長の時代を迎えた。産業構造の枠組みの変換や歴史・伝統・文化の再評価など、持続可能な社会構築への要請が高まっている。特に、雇用の多様化・流動化が進む中、子どもたちの進路をめぐる環境は、大きく変化している。また、教育を取り巻く環境も変化してきており、若者をめぐる様々な課題が浮かび上がっている。さらには、若者の勤労観・職業観の未成熟や、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力の欠如が各方面から指摘されている。このような中で、子どもたちが将来出会うであろう様々な課題に、柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるよう、「生きる力」を育むことが強く求められている。

学校から社会への移行をめぐる課題としては、新規卒業者に対する求人状況の変動や、求職者と求人者の希望の不適合など「就職・就業をめぐる環境の激変」、あるいは社会人としての意識の希薄さや勤労観・職業観の未熟さなど「若者自身の資質などをめぐる課題」が挙げられる。また、子どもたちの生活・意識の変容に関して、社会的自立の遅れ、労働への関心・意欲の低下など「子どもたちの成長・発達上の課題」、モラトリアム傾向や目的意識の希薄な進学・就職など「高学歴社会におけるモラトリアム傾向」が挙げられる。

したがって、本分科会では、自立した社会形成者育成の観点から、学校・社会を関連付けた教育、社会人としての基礎的な資質・能力、発達に応じた指導の継続、家庭・地域と連携した教育など、キャリア教育を推進させるための具体的方策を明らかにする。

リーダーシップの視点

(1) 自尊感情を高め、自己や他者への積極的関心を形成・発展させる教育課程の編成

社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力は「基礎的・汎用的能力」である。「基礎的・汎用的能力」は、他者と協力・協働して社会に参画し今後の社会を積極的に形成する「人間関係形成・社会形成能力」、自分自身の肯定的な理解に基づき主体的に行動し、自らの思考や感情を律しながら進んで学ぼうとする「自己理解・自己管理能力」、課題を発見・分析し、計画を立てて処理・解決する「課題対応能力」、働くことの意義を理解し、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく「キャリアプランニング能力」の四つの能力に整理される。

キャリア教育を通じて、働くことや夢を持つことの大切さを理解し、自尊感情を高め、自己及び他者への積極的な関心を形成していけるよう、各教科・領域等を横断的・総合的に指導していく体制の整備も含め、教育課程の編成における校長の果たす役割と指導性を明らかにする。

(2) 身の回りの仕事や環境に関心をもち、目標に向かって努力する態度の育成

小学校におけるキャリア教育は、全教育活動の中で6年間を通して意図的・継続的に推進していくものである。小学校の成長は著しく、社会的自立・職業的自立に向けて基盤を形成する重要な時期である。ここでは、一人一人の発達に応じて、人、社会、自然、文化と関わる体験活動を、身近なところから徐々に広げ、ていねいに設定することが大切である。また、各種当番活動や勤労生産的な活動などを通して、自らの役割を果たそうとする意欲や態度を育むことが重要となってくる。すなわち、働くことに対する実感的な理解を深め、他者と関わる力を育成し、社会生活の中での責任や勤労などの概念を理解・定着させる校長の役割と指導性について究明する。

一人一人の社会的、職業的自立に向けた基盤形成を図る キャリア教育の推進と校長の在り方

旭川地区 旭川市立末広北小学校 林 邦 子

I 趣 旨

少子高齢化が進み、経済状況や産業構造の枠組みが大きく様変わりするなど、環境・経済・社会ともに様々な課題を抱える中、持続可能な社会構築への要請が高まっている。そうした中、次代を担う若者の勤労観・職業観の未成熟、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力の欠如が各方面から指摘されている。

このような状況から、学校には、子ども一人一人の資質能力の向上を図り、将来出会うであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるよう、「生きる力」を育成することが一層強く求められている。

子どもたちが「生きる力」を身に付け、力強く生きていくために必要な資質や能力を育むキャリア教育の推進に、教育改革の担い手のトップである校長の果たす役割は大きい。校長は、各教科・領域等を横断的・総合的に指導していく教育課程の編成や体制の整備、責任や勤労の概念を実感的に理解・定着させる教育活動の充実などに、その指導性を十分に発揮していかなければならない。

旭川市小学校長会では、旭川市の教育行政方針を受け、「次代を展望し、学校改善を確かに実現する校長会」を大目標に、重点として「心豊かでたくましく生きる児童を育成する創意と活力のある学校経営の推進」を掲げ、「教育改革のねらいを踏まえ、経営方針や重点等を明確にした学校経営の充実」「学校や地域の特性を生かした創意ある教育課程の充実」「心豊かにたくましく生きる力を育てる指導の充実」「ゆとりと潤いのある教育環境づくりの充実」等の観点から情報交流と研修を重ね、学校経営の充実に努めてきた。

その中で、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力の中核を為す「基礎的・汎用的能力」を一人一人の子どもに確実に育み、キャリア発達を促すキャリア教育の具現化と充実が求められている。昨年度は、旭川市小学校長会として各校のキャリア教育の全体計画を冊子にまとめ、キャリア教育の枠組みについて情報交流と共有化を図っている。

本研究では、キャリア教育に向けて校長の指導性発揮の視点や実践の状況についてアンケート調査を

行い、市内各校における実践の成果と課題を把握するとともに、今後より一層の推進を図るために校長の果たすべき役割と指導の在り方について研究を深めた。

II 研究の概要

1 研究の視点と研究内容

<リーダーシップの視点(1)>

自尊感情を高め、自己や他者への積極的関心を形成・発展させる教育課程の編成

研究内容 教育課程の編成、校内体制の整備等における校長の果たす役割と指導性

- ① 学校経営におけるキャリア教育の明確な位置付け
- ② キャリア教育の浸透化を図る教育課程の編成
- ③ キャリア教育を推進する校内体制づくり

<リーダーシップの視点(2)>

身の回りの仕事や環境に関心をもち、目標に向かって努力する態度の育成

研究内容 社会生活の中での責任や勤労などの概念を理解・定着させるために校長の果たす役割と指導性

- ① 社会生活の中での責任や勤労について実感的に理解・定着させる校長の役割
- ② 社会生活の中での責任や勤労について実感的に理解・定着させる教育活動の展開

2 旭川市校長会としての取組

《提言1》

キャリア教育の視点の明確化と浸透化を図る教育課程の編成と校内体制づくり

学校においては、子どもたち一人一人が、やがては職に就いて社会で自立するとともに、その形成者としての役割を見だし自己実現を図っていくこと、すなわち、社会的・職業的に自立していくことを念頭に、教育活動全体を通じて「基礎的・汎用的能力」を育み、望ましい職業観・勤労観を養う必要がある。

そのために校長は、学校経営においてキャリア教育の視点を明確に示すとともに、全教育活動を通して意図的、計画的、発展的に育む教育課程の

編成及びその実施を支える校内体制づくりにリーダーシップを発揮しなければならない。

以上のことを踏まえて、旭川市小学校長会では、各校において学校経営方針にキャリア教育をどのように位置付け教育課程に浸透させているか、その手だてについて状況を分析して成果と課題を明らかにし、校長の果たすべき役割と指導性について検証した。

《提言2》

社会生活の中での責任や勤労の概念を実感的に理解・定着させる教育活動の充実

自分の過去・現在・未来を見据え、社会との関連の中で自分らしい生き方を展望し実現していくことは、生涯にわたる課題であり、それはまた、年齢とともに自然に獲得できるものでもない。子どもたちのキャリア発達には、外部からの体系的・組織的な働きかけが不可欠である。

そのために学校は、子どもたち一人一人が発達に応じて「自己理解」を深め、「社会とのつながり」を実感し、「社会の中を生きる」意欲と能力を高めていくことができる教育活動を展開することが重要であり、校長には、その充実に向けたリーダーシップの発揮が求められる。

以上のことを踏まえて、旭川市小学校長会では、各校におけるキャリア教育が具体的にどのように展開され、その中で校長がどのような役割を果たしているのかその状況を分析して成果と課題を明らかにするとともに、今後の改善点について検証した。

3 提言内容

《提言1》

キャリア教育の視点の明確化と浸透化を図る教育課程の編成と校内体制づくり

(1) 学校経営におけるキャリア教育の明確な位置付け

① アンケート結果から

ア 学校経営の基盤にキャリア教育の視点を置いている学校が6割、年度の重点目標としている学校も半数を超えるなど、全ての学校が何らかの形で学校経営方針としてキャリア教育を示していることから、多くの校長が、学校経営においてキャリア教育の推進を極めて重要視していることがわかる。

イ 学校経営への明確な位置付け＝教職員の意識の明確化となることが必要であり、そのためには校長がどのように学校経営方針を示すことが有効か、各地区校長会で研修を重ねている。

② 旭川市立大有小学校の実践例

「基礎的・汎用的な能力」に関わり、諸調査の結果や学校評価など具体的な根拠から自校の課題を明らかにしてキャリア教育推進の視点を示すことにより、教職員の理解と実践への意識化が図られた。

(2) キャリア教育の浸透化を図る教育課程の編成

① アンケート結果から

ア キャリア教育の視点を教育課程に浸透させるためには、実施する教職員の意識改革と指導力向上が不可欠であり、各校で職員会議や校内研修を重ねている状況にある。更に、多くの校長が、キャリア教育に関わる様々な情報提供に努めている。

イ 総合的な学習の時間や特別活動に重点を置き、人や社会と関わる体験活動を通して「基礎的・汎用的な能力」を育むことを重視している学校が多い。

一方で、教科・領域に重点を絞らず、全教育活動の基盤としてキャリア教育を置いている学校が3割ほどあり、重点化・焦点化について、校長による考え方やとらえ方の違いが見られる。

② 旭川市の小学校におけるキャリア教育の全体計画

昨年度、学校経営部が各校の作成状況について学校経営資料集としてまとめている。キャリア教育推進の基本姿勢や重点など、自校の計画の見直しや改善の参考とすることができた。

③ 旭川市立旭川第三小学校の実践例

学年ごとにキャリア教育ファイル（全体計画、年間指導計画、教材や研修資料、評価、マイノート等、キャリア教育に関する全てをまとめたもの）を作成することで、学年や担任が替わっても、継続的・発展的にキャリア教育が展開できるようになった。

(3) キャリア教育推進のための校内体制づくり

① アンケート結果から

ア プロジェクトチームなど新たな体制づくりを行った学校は少ないが、約半数の学校では、教育課程検討委員会でキャリア教育の視点から教育課程の見直しを行っている。また、キャリア教育の全体計画は旭川市の全小学校で整えられているが、作成については教務部が中心となっている学校が多い。

イ キャリア教育の推進には、実施を支えていく校内体制が必要であるが、そのために特別な校内体制を置くのではなく、教務部の役割とし、教務部をどのように動かすかを重要視している校長が多いと推察される。

② 旭川市立東五条小学校の実践例

教務部が、キャリア教育の視点から自校の教育活動について意義とねらいをとらえ直し

て職員会議で提示，共通理解することにより，全教職員がキャリア教育の視点を明確にもって教育活動を進め，活動内容の充実が図られた。

《提言2》

社会生活の中での責任や勤労の概念を実感的に理解・定着させる教育活動の充実

(1) 社会生活の中での責任や勤労について実感的に理解・定着させる校長の役割

① アンケート結果から

ア 全ての校長が，教職員や児童，家庭・地域に対し，直接関わる機会を重視し，積極的に働きかけを行い，深く関与している。

イ 6割の校長が職員会議や校内研修など全体の場の他，授業参観を通して，個別に教員への助言を行っている。

ウ 児童に対しても，全校集会や学校行事だけでなく，清掃活動や児童会活動など，日常的・個別的に働きかけている。

エ 地域や関係機関への働きかけとしては，人や社会と関わる体験活動を重視する視点から，半数以上の学校で人材や施設の発掘に校長が力を発揮している状況が伺える。

オ 中学校とは4割の学校で連携を進めているが，校種，幼・保，特別支援学校などとも連携し継続的発展的な取組を大切にしていることがわかる。

② 旭川市立末広北小学校の実践例

地域行事において，主催する市民委員会と連携し，子どもたちの単なる発表や楽しみの場ではなく，子どもたちが，地域の人と一緒に楽しむプログラムを主体的に企画運営することにより，人と関わる力や責任，勤労について実感的に学ぶ機会としている。

(2) 社会生活の中での責任や勤労について実感的に理解・定着させる教育活動の展開

① アンケート結果から

ア 多くの学校で，日常的な当番活動や係活動など，授業以外の学校生活が，身の回りの仕事や環境への関心を高めて，社会生活の中での責任や勤労などについて理解を深め，態度を養う重要な場になっているととらえている。

イ 校外の人や社会にふれる体験や，勤労体験的学習など，“体験”が，職業観や勤労観の形成に大きな効果を上げている。

ウ 学校行事において，一人一人にしっかり目標をもたせ，ふりかえりの場（評価）を大切にすることが，達成感や自己有用感を高め，目標に向かって努力する意欲と態度を高めている。

② 旭川市立青雲小学校の実践例

子どもの各学校段階でのキャリア発達を継続的に記録する上川版キャリアノート「マイノート」（目標カード，ふりかえりカード，自己評価カードから構成）を自校版に改善して活用している。

III ま と め

1 成 果

- (1) 学校経営へのキャリア教育の位置付けや，教育課程への浸透化の手だてについて，各校の状況を明らかにすることにより，キャリア教育自校化への参考とすることができた。
- (2) 現在行っている教育活動の意義やねらいをキャリア教育の視点で再構築することにより，子どもたち一人一人の社会的・職業的自立に向けた「基礎的・汎用的能力」を育成するということらえ方を共有できた。
- (3) 校長がより明確な方針と手だてを示すことが職員の意識変革を生み，キャリア教育の視点からの教育活動の展開につながることを確認できた。
- (4) 「人と関わる」体験，「社会と関わる」体験を通して自己理解を深め，人や社会と関わる喜びの実感を重ねていくことの重要性及びその機会の充実に向けた家庭や地域，関係機関との連携に果たす校長の役割の大きさを再確認できた。
- (5) キャリア教育についての理解はまだまだ浅く，教職員，児童，家庭・地域に対するあらゆる機会をとらえた校長の直接的な働きかけが有効であることとその具体的手だてについて明らかにできた。

2 課 題

- (1) 「基礎的・汎用的能力」の育成について，概念的なとらえではなく，具体的に「どのような力を」「どこで」「どのように」育成していくのか，明確な視点をもって実践，検証（評価）していくシステムの構築が必要である。
- (2) 義務教育を終えたら社会に出られる，職業に就くことができる，そのために最低限必要な力を9年間を通して確実に育むという前提のもと，校種間で連携して体系的に取り組むキャリア教育の推進が必要である。
- (3) キャリア教育という特設の時間ではないだけに，その意義やねらいを教育課程全体に浸透させるためにはキャリアカウンセリングなどを含め，職員の資質を高める研修を重ねていくことが一層大切である。